

屋久島の山岳トイレの現状とこれから

小原比呂志（屋久島野外活動総合センター）

屋久島の登山者数

屋久島に渡るためにはフェリー、高速船、飛行機のいずれかに乗ることになるため、これらの定員が事実上の入島制限になっている。一般に1993年の世界遺産登録によって来島者が増加したと思われるが、そうではない。屋久島入り込み客数は1970年代始めから87年まで10万人程度で横這いを続けていた。1980年代末までの屋久島の年間観光客数は5万人程度。当時の山・森を含めた入山者のデータは存在しないが、白谷雲水峡、縄文杉、宮之浦岳などは3000人程度か、それ以下と思われる。当時の看板観光ポイントで大型バスもすでに入っていたヤクスギランドですら、多く見積もっても1～3万人程度だっただろう。

ところが1989年に高速船トッピー1号、92年に同2号が就航すると入り込み客数は一気に24万人まで跳ね上がった。その後世界遺産に登録されてからはむしろゆるやかな増加を続け、2007年には40万人に達している。このうち観光客の割合は、一応66.6%とされており、27万人程度ということになる。

2007年にカウントされた入山利用者は、ヤクスギランド10万5000人（39%）、白谷雲水峡11万2000人（41%）、縄文杉6万8000人（25%）、宮之浦岳1万5000人（6%）である。入島者20万人のうち登山者が4%の利尻島などと比較して、屋久島入島者には登山や森歩きを目的とする人が圧倒的に多いことがわかる。なお2008年（1～12月）に縄文杉登山者は9万2600人、宮之浦岳登山者は1万6500人に達した。

意外なことに屋久島では観光に否定的な地元世論が強い。観光需要と公共事業不況が同時に進んだことによる急激な変化への反発と不安が、世論の中心にあるためである。島内の産業は大きく観光業にシフトしているにもかかわらず、観光客の増加は地域を乱す迷惑なことである、と認識している人は多い。観光分野での屎尿処理のような問題では、特に生理的嫌悪感が露骨になりがちで、行政サイドですら因果関係の確認なしにイメージで物事を判断したり、関連のない問題を観光客の増加のせいにしてしまうケースがしばしば見られる。

トイレをめぐる動きと現状

1. 避難小屋

1960年代から70年代の初頭に、鹿之沢、高塚、石塚、淀川の各避難小屋が整備され、トイレ（各一穴）が敷設されている。この時期の登山は麓から直接登るのが普通で、登山者も大学山岳部や社会人山岳会の遠征などに限られていた。島内では当時伐採基地の

あった小杉谷をベースにトロッコ道を利用して高塚～宮之浦岳～花之江河～小杉谷の循環ルートが日帰りで行かれていた。小杉谷には当時600人を越える職員と家族が生活していたが、屎尿処理をどのようにしていたかは不明である。

70年代末、屋久杉伐採の進展とともに現在の淀川登山口まで林道が入り、宮之浦岳へ日帰りが可能になった。80年代の初めには環境庁による登山道整備事業が開始された。「日本百名山」ブームが起きるとともに、宮之浦岳登山が一般化し始め、85年に淀川小屋がトイレ（一穴）とともにログキャビン風に改築された。しかしこの頃までは、連休など特別な時期を除いて入山者が多いとは言えず、トイレの必要性はさほど感じられていなかった。90年代に入ると百名山ブームが本格化し、淀川～宮之浦岳～高塚（1泊）～縄文杉～白谷または荒川の縦走がメインルートとされ、じわじわと利用が増えてきた。90年に淀川登山口トイレ設置、92年には新高塚小屋が新しい縦走中継点として建設された。併設のトイレ（一穴）は母屋玄関から50mほど離れており、登山者が暗いうちに用を足しに言ったまま帰らないという「トイレ遭難」が2件続けて起きて物議をかもしした。

古い高塚小屋は「移転」のため撤去される予定だったが、増加し始めた縄文杉登山の補助施設として非常に必要、という地元陳情が認められトイレともども残された。

世界遺産への登録は1993年12月である。トイレ施設は92年から2009年現在に至る17年間、そのまま使われ続けてきた。

各トイレは利用の少なかったこともあり、環境庁（省）から鹿児島県への補助金を地元町が窓口となって有志グループ等に請け負わせ、必要に応じて汲み取り埋設処理を行っていた。しかし利用の増え始めた90年代後半からは、埋設場所が不足し始めた。当時の担当者によると、対策の必要を町に訴えても、「可能な範囲で」なんとかやってくれ、と指示（？）され、仕方がないので離れたところに直接撒いていたという。淀川小屋などでは近くの切り株の穴に流し込んで、それがそのまま川に流れ込んでいたことが発覚した。

2000年代に入り利用が増えるにつれて、淀川小屋と新高塚小屋、高塚小屋のトイレ処理法が問題視され批判が高まった。

淀川小屋トイレでは2006～08年に片岡菌試験が行われた。試験を行った栄電社によると、臭いは期待通り消えてトイレを利用しやすくなったが、水分が蒸発せず、屎尿の量を減らすことには失敗した、トイレ施設そのものが小さすぎて思ったような成果を上げられず残念、淀川登山口トイレなどに場所を代えて試験を続けたいとのことだった。

2. 縄文杉その他

ある意味順当に登山者の増えた宮之浦岳にたいし、縄文杉日帰り登山はいわばビッグバンを起こした点が特異である。

正確なデータはないが、縄文杉の登山者は、93年頃には多い日で30人程度、平均すると10数人／日程度だったと思われるが、2008年には平均250人／日となり、5月4日には実に1111人／日という最高記録を樹立した。大雑把な数字だが15年間で

20倍以上となったことになる。増えたというよりも、突然出現し爆発的に増加した、と表現するのがふさわしい。

これほどの人数になると管理側も否応なしに対応を迫られ、94年に荒川登山口トイレ、2000年小杉谷荘跡仮設トイレ、2003年大株歩道トイレ、2007年小杉谷荘跡バイオトイレ（阪急交通社の寄付による）と新設が続いた。これらの設置により縄文杉ルートトイレ状況は大幅に改善され、十分な状態である。ただし大株歩道、バイオトイレともに荒川登山口からルート（トロッコ道）沿いに引いた電線に依存しており、落雷や台風による停電が頻繁におこるため、使用できなくなることがある。

また大株トイレは鹿児島県が施設に7000万、電線に6000万、合計1億3000万という予算を費やして、東和産業のトイレユニット「せせらぎ」を導入した。これは完全循環式で排水を外に流さないという触れ込みのシステムだが、現実には分解し切れていないのか、循環洗浄水は茶濁し常に悪臭がひどい。

また白谷雲水峡などには、入口に満足なトイレはなかったが、94年に合併浄化槽を備えたトイレが建設された。

今後の展望

1. 避難小屋

縄文杉日帰りルートに関しては、メンテナンスの厄介さはおくとして、現在の施設がすべて順調に可動すれば、特に不足はないと考えられる。ただし登山者がさらに増加すれば、再び不足し始めるのは明らかだ。エコツーリズム推進法等の適用による入山制限等が検討されるだろう。

17年間放置され続けた避難小屋のトイレも、ここに来てようやく環境庁が施設の改善に乗り出し、すでに調査はすすんでいる。まず最も利用が多く、遠隔地にあるため処理も難しい新高塚小屋トイレの改善計画が今年度中に始まろうとしており、TSS土壌処理方式が採用される予定である。計画が固まり次第発表されるだろう。淀川その他のトイレについても、順次改善が図られる見通しである。

ただし、環境省は（旧）高塚小屋について、携帯トイレのブース新設しか検討していない。近年縄文杉の宿泊登山が盛んになり（旧）高塚小屋こそ現在もっとも利用が増えつつある避難小屋である。現実的に考えて（旧）高塚小屋のトイレ新築は不可欠だろう。

2. 携帯トイレ

関係行政機関等で構成する山岳部利用対策協議会では、縄文杉と宮之浦岳の日帰り登山客の尿尿量の減量を目的として、また現在避難小屋トイレの改善までのつなぎとして携帯トイレの導入も推進しようとしている。しかし現在屋久島町クリーンサポートセンターの焼却炉では小用使用済みパックは焼却できるが大便使用済みパックは焼却できず、処理システムの見通しが立っていない。

屋久島のような森林生態系では、小用はさほど環境に悪影響をもたらさない。宮之浦岳登山道の花之江河湿原や投石平にブースの設置が予定されているが、大使用に使用できない現状では携帯トイレにあまり意味はなく、一応導入しました、というアリバイ作りにしかない可能性が高い。

特に縄文杉にはすでにトイレが完備されており、しかも利用者には登山未経験者が多いため普通の登山者に比べても携帯トイレへの抵抗感が強く、ハードルは高いだろう。

管理財源をめぐる混乱

入山者の増加を見越して、いち早く「協力金」の徴収を始めたのは林野庁である。林野庁は行革による省庁再編の手を切り抜けた後、伐採の終了した屋久島で、観光客の「魔の手」から自然を守る、という立場を確立する作戦に出た。縄文杉へ集中する利用を自然休養林のヤクスギランドと白谷雲水峡へ誘導し、そのための経費として300円／人の協力金を徴収するシステムを作った。協力金には税金の二重取りという側面があり、また任意のものなのに料金のような振りをしているということへの反対も多かったが、集まった金額は林野の収入になるが同額が林野庁から町へ委託されるということで町が納得し、施行されることになった。現在この協力金と白谷入口トイレ及び白谷山荘トイレの管理は「レクリエーションの森保護管理協議会」の担当だが、実体は林野庁管理のままである。

ヤクスギランドにトイレはなく、隣接する町営の休憩施設「森泉」のトイレが使われるのだが、これは町の施設であるために、林野庁はこのトイレに協力金を供出しなかった。町はやむなくチップ制を導入したが、利用者から見ると一体の施設であるにもかかわらず、トイレと入口でそれぞれ別に金を取られるというわかりにくい事態になった。その上2008年にはこれに保全募金が加わり、利用者は1ヶ所で3つの協力金(合計900円)を要求されるという事態になった。

なお保全募金は町環境政策課、トイレチップは町商工観光課が管理している

島内のさまざまな観光ポイントを有する集落などはこの事態を見て「行政が自分の所で金を取っていいのなら、我々も取っていいのでは」と受け止め、あちこちで協力金をとろうという動きが目立ってきた。屋久島観光協会は「みっともない」としてこれを抑制する姿勢を見せた。

ところが2003年、鹿児島県は縄文杉と宮之浦岳で協力金徴収の検討を始めた。これに対して地元紙や山岳雑誌が批判記事を掲載するなどの動きがあり、2005年には議論が中断した、2006年には新高塚小屋などの尿尿を人に搬出させるという計画がたてられ、搬出人には利用の非常に多い大株歩道を下らせて利用者にわざと見せ、金を徴収しやすくするとともに、縄文杉登山客への教育的効果を期待する、というような理由付けが真面目に検討された。

2008年に環境省の避難小屋トイレの改善計画がしだいに形を成してきた。これまでの県への補助事業から環境省の直営事業となり、ハードの整備を環境省、管理を屋久島町

が担当するという方向付けが行われた。ここで「山岳部保全募金」の創設が打ち出され、トイレの整備までは人肩で屎尿を搬出、各トイレ新設後はその管理費用およびその他の自然施設の管理にこの募金を活用してゆく、その収支決算はガラス張りとする、という方針が打ち出された。

2007年のヤクスギランド＋白谷雲水峡の協力金は5200万円にのぼり必要な額をはるかに超えている。08年もほぼ同程度の収入となっている。これに対し2008年度の山岳部保全募金額は850万円であり、管理費用としては不足している。林野庁が効率よく「協力金」の徴収に成功し、既得権をたてにこれを手放さずにいる。しかし屋久島全体の保全管理のためには受益者負担とその効率のよい配分が不可欠で、このような不均衡は解消されなければならないが、解決の道筋は見えていない。

筆者の私見

屋久島の森林生態系は、踏み込むだけで壊れてしまい元に戻らないような、北海道や東北の高山帯や湿原とは分解力が大きく異なっている。氷雪に閉ざされた厳しい冬への対応を余儀なくされる他地域に比べ、台風に鍛えられ自然の回復力の強い屋久島は、あの国有林の大伐採から早くも立ち直りつつあることからわかるように、さまざまな面で自然保護のための改善を試みやすい場所なのだ。

しかし、縄文杉ブームや世界遺産のおかげで屋久島は急激に全国区となり、マスコミや屋久島に注目する国民のさまざまな言動の奔流にさらされるようになった。このことが原因で屋久島の地元世論は今、排他的な地域ナショナリズムに陥っているように見える。地元は絶対に正しく、地域を乱す観光化は悪であり、ささやかなことでも激しく攻撃するほど正義だとするような風潮が見られる。

トイレのような問題はまさにこのようなナショナリズムのツボを突いてしまう。用を足した痕が2つ3つあれば「非常識な登山客が山を汚染している」と言われ、小屋のトイレがたまたま一杯になっていれば「山では屎尿があふれている」と非難される。

しかし、実際に現場で何が問題なのかをきちんと確認すると、それほど大変な問題は起きておらず、問題があったとしても、そのほとんどは解決に向かっていることが多い。

たぶん一過性のナショナリズムはいずれ収まるだろう。今の日本にとって屋久島の自然を守りかつ楽しむことがなぜ大切なのか、そのことを踏まえてどのような未来ビジョンを作り上げることができるか。それこそが、今後さまざまな問題を解決して、屋久島が世界遺産の名にふさわしい優れた町になるための重要なポイントである。

現在、荒川登山口へのアクセスはシャトルバス化が進んでおり、これをうまく利用すればもっとも懸案とされてきた縄文杉ルート利用人数のコントロールも可能になるだろう。これまでゆっくり過ぎるペースでやってきた屋久島だが、いまやあらゆる面で、現場に即し、道筋の通った対応が求められる時代になってきている。

屋久島山岳部トイレ設置状況

(平成20年3月31日現在)

番号	施設名	設置年度	設置者	管理委託先	管理費	処理方法	規模	主な利用者	周辺登山道の利用人数
①	鹿之沢避難小屋付帯トイレ☆	S37	鹿児島県	旧上屋久町	県委託費※ ※の合計 3,228,750-	汲み取り 現地埋設(＋し尿搬出)	男女兼用1基	鹿之沢小屋宿泊者	—
②	高塚避難小屋付帯トイレ☆	S45	旧上屋久町(県から譲渡)	旧上屋久町	県委託費※	汲み取り 現地埋設＋し尿搬出	男女兼用1基	縄文杉日帰り登山者 高塚小屋宿泊者	H18 63,237 H19 68,204 H20 92,600
③	石塚避難小屋付帯トイレ☆	S46	鹿児島県	旧屋久町	県委託費※	汲み取り 現地埋設(＋し尿搬出)	男女兼用1基	石塚小屋宿泊者	—
④	白谷山荘付帯トイレ☆	S54	旧上屋久町	屋久島レクリエーションの森保護管理協議会	自然休養林協力金 事業 7,403,750-	汲み取り し尿搬出	男女兼用大1基、小1基	白谷雲水峡日帰り散策者 白谷山荘宿泊者	白谷利用者数 H18 99,047 H19 112,689
⑤	淀川避難小屋付帯トイレ☆	S60	鹿児島県	旧屋久町	県委託費※	汲み取り 現地埋設＋し尿搬出	男女兼用1基	宮之浦岳日帰り登山者 淀川小屋宿泊者	H18 14,839 H19 15,281 H20 16,490
⑥	淀川登山口トイレ	H2	鹿児島県	旧屋久町	県委託費 338,500-	汲み取り パキューム車搬出	男子用第1基、小3基 女子用2基	宮之浦岳登山者	H18 14,839 H19 15,281 H20 16,490
⑦	新高塚避難小屋付帯トイレ☆	H3	鹿児島県	旧上屋久町	県委託費※	汲み取り 現地埋設＋し尿搬出	男女兼用1基	新高塚小屋宿泊者	—
⑧	ヤクスギランド入口トイレ	H4	旧屋久町	屋久島レクリエーションの森保護管理協議会	自然休養林協力金 事業、チップ 340,800-	水洗	男子用第1基、小3基 女子用2基	ヤクスギランド利用者	ランド利用者数 H18 100,186 H19 105,514
⑨	白谷雲水峡入口トイレ	H6	旧上屋久町(県から譲渡)	屋久島レクリエーションの森保護管理協議会	自然休養林協力金 事業 946,250-	水洗(無放流・地下浸透式)	男子用大1基、小2基 女子用2基、身障者用1基	白谷雲水峡利用者	白谷利用者数 H18 99,047 H19 112,689
⑩	荒川登山口トイレ	H6	鹿児島県	旧屋久町	県委託費 619,100-	水洗(無放流・蒸発散式) ※パキューム車搬出	男子用大1基、小2基 女子用2基	縄文杉登山者	H18 63,237 H19 68,204 H20 92,600
⑪	大株歩道入口トイレ	H14	鹿児島県	旧上屋久町	県委託費 4,778,550-	水洗(浄化循環式) トロッコ・パキューム車搬出	男子用大1基、小3基 女子用3基、共用1基	縄文杉登山者	H18 63,237 H19 68,204 H20 92,600
⑫	小杉谷トイレ	H19	観光協会(H20屋久島町譲渡予定)	予定(屋久島町)	—	コンポスト処理	男女兼用2基	縄文杉登山者	H18 63,237 H19 68,204 H20 92,600

☆山岳部保全募金によるし尿搬出対象トイレ

＿山岳トイレ調査対象トイレ

資料提供:環境省屋久島自然保護管事務所



屋久島山岳部トイレ設置位置図